功績調書

たかぎ　おさむ
氏名　髙木　修

髙木修氏（京都大学文学博士）は、昭和15年６月23日に京都府に生まれ、昭和40年3月に京都大学文学部を卒業し、昭和42年3月に京都大学大学院文学研究科修士課程を修了し、昭和45年3月に京都大学大学院文学研究科博士課程（心理学専攻）を所定単位習得後退学されました。昭和42年4月に創設された関西大学社会学部に昭和43年4月助手として着任し、続いて昭和46年4月専任講師に、昭和49年4月助教授に昇任を経て、昭和56年4月には関西大学社会学部教授となられました。そして、平成21年4月には、関西大学における教育上、学術上特に功績があったとして名誉教授の称号を与えられ、今日に至っています。

髙木修氏の専門領域は社会心理学で、京都大学の学部、大学院及び関西大学での研究をまとめて昭和59年1月に「態度構造及び態度と行動の関係に関する研究」で京都大学文学博士の学位を取得されました。社会心理学の基幹概念である「態度」は、行動の準備状態と定義され、「行動」の予測要因とされていますが、現実の生活場面での研究では両者の間の非一貫性がしばしば報じられていました。そこで髙木修氏は、態度構造という新たな視点から、態度が十分発達していれば行動とよく対応し、態度から行動が予測できると仮定し、それを実証することにしました。当時の態度構造理論は、態度が認知、感情、行動傾向の３成分から構成されると仮定されていたので、髙木修氏は、独自に開発した３成分の態度測定尺度を用いて社会調査を実施し、多様な人々から得た大量データにコンピュータによる先端的な因子分析法をはじめとする各種の多変量解析法を適用して、構造的に発達した態度の持ち主ほど、態度と一貫した行動を行っていることを、種々の社会問題化している行動を用いて実証されました。例えば、昭和50年10月関西大学附設研究所の公害問題研究班の一員として、海や湖沼の富栄養化の原因とされる合成洗剤について、その問題性を認識している主婦ほど石けんに洗剤を切り替え、その態度と行動を一貫させていることを解明されました。また、昭和54年4月米国スタンフォード大学での1年間の在外研究を契機に、米国でも最新のテーマであった「人を助ける行動」に関して、例えば、非緊急時の献血行動や緊急時の災害救援行動などと思いやりの利他的態度の間の一貫性に関して実証的研究を行い、主要な研究テーマとなりました。

髙木修氏の研究業績には、「著書」として、単著24冊と共著11冊の合計35冊が、この他に単独監修が13冊あります。これは「21世紀の社会心理学」と題するシリーズで、20世紀の社会心理学研究を展望し、21世紀の社会心理学研究のあるべき方向性を提案する趣旨で企画･発刊したもので、平成18年9月に日本社会心理学会から出版特別賞を受賞されています。また、「学術誌掲載論文」としては、単著30編、共著91編の合計121編がありますが、このうちの58編はレフリー制雑誌の掲載論文です。この他に、翻訳が単訳と共訳含めて5冊、辞書が単著と共著含めて3冊、書評が1編あります。「学会発表」では、多数のため、平

成16年から平成20年までの5年間に限ると、国内学会の72件、国際学会の７件の合計79件と極めて多く、科学情報の発信に積極的であることが分かります。

このように、髙木修氏の研究業績は、その時代時代での先進的な分野を切り開いた研究ばかりで、質量いずれの面においても卓越しており、多くの研究者や実務家が参照・引用する「名著」と評される著作が多数含まれており、学界に大きく貢献する代表的な研究者として国内外から高く評価されています。

教育分野の業績としては、学部教育では、人と人の間の関係と行動に関する「対人社会心理学」を専門科目として授業担当され毎年200名を超える受講生を集め、２年間の少人数ゼミナールも担当されました。一方、大学院教育では、関西大学の院生と、当時社会心理学の専任教員がいなかった京都大学と同志社大学の院生で参加を希望する者を対象に、開かれたゼミナールとして「対人社会心理学」の研究指導をされました。平成21年3月に定年退職するまでと、引き続き特別契約教授として2年間勤務する間に指導教授として与えた学位は、学部の学士号が589名、大学院の修士号が45名、博士号が16名（内、国費の米国留学生1名）と極めて多数に及んでいます。

関西大学における教育行政上の貢献では、昭和51年10月から学生部長代理を、平成2年5月から教学部長代理（学長補佐、第2部担当）を、平成4年10月から社会学部長を、平成10年10月から大学院社会学研究科長をそれぞれの任期務められました。さらに、平成4年より3期6年間大学協議会協議員を、学校法人関西大学では、平成4年より3期10年間大学評議員を務められました。このように、髙木修氏は学内の数々の役職に就き、関西大学の大学、学部、大学院および学校法人関西大学の充実と発展に多大の功績を残したとして平成21年3月に功績表彰されました。

他方、学外の教育活動としては、学部に関して、大阪大学人間科学部（昭和55年10月）、広島大学総合科学部（昭和61年10月）、東京大学文学部（昭和63年10月）、岡山大学文学部（平成3年4月）、名古屋大学教育学部（平成3年8月）など10校の国公立大学で、京都産業大学（昭和50年4月）と北星学園大学文学部（平成3年4月）の2校の私立大学で、大学院に関しては、広島大学大学院教育学研究科（平成元年4月）と愛知学院大学大学院文学研究科（平成9年4月）の2校で非常勤講師を務め、主として「対人社会心理学」の講義を担当されました。

学外の教育・研究評価活動としては、日本学術振興会の科学研究費委員会専門委員を平成13年1月から2年間、特別研究員等審査会専門委員を平成13年8月から2年間、特別研究員等審査会専門委員及び国際事業委員会書面審査委員を平成19年8月から2年間務められました。大学の外部評価については、平成13年10月に広島大学大学院生物圏科学研究科、平成17年12月と平成22年1月の2回に亘って大阪大学人間科学部･大学院人間科学研究科の教育、研究の評価に携わられました。また、大学評価･学位授与機構大学委員会専門委員（心理学）を平成14年8月から2年間務められ、国立大学1校、公立大学1校、国立研究所1箇所について研究・教育活動の評価を行なわれました。加えて、心理学界の発展を目指し学術会議行動科学連絡委員会委員を平成15年4月から2年間務められました。

学外の学会活動としては、（公益社団法人）日本心理学会、日本社会心理学

会、日本心理学諸学会連合、日本グループダイナミックス学会、日本繊維製品消費科学会に所属し、数々の役職を歴任して来られました。特に、（公益社団法人）日本心理学会では、昭和61年10月から平成元年11月まで代議員、平成2年7月から平成15年6月まで評議員、平成15年7月から平成17年6月まで理事、平成17年7月から平成19年6月まで常務理事（学会誌編集担当、編集委員長）、平成21年7月から平成23年6月まで常務理事（財務担当、公益社団法人化検討委員）を務め、学会への多大の貢献に基づき平成26年6月に名誉会員に推戴されました。特に、日本における最も伝統ある最大の学会の公益社団法人化をその責任者の一人として初めて実現し、学会を社会に役立つ公器として位置づけたことは大きな功績と言えましょう。同学会は、以後、市民を対象に公開講演会や一般書の刊行を以前にも増して積極的に展開しています。また、日本社会心理学会では、昭和55年12月から平成7年3月まで理事、平成9年4月から平成11年3月まで常任理事（渉外担当）、平成11年4月から平成13年3月まで常任理事（編集委員長）、平成13年4月から平成17年3月まで2期4年間会長を務め、平成22年9月に名誉会員に推戴されました。特に、編集委員長として、学会機関誌の審査･発行手続の迅速化と過程の透明化を計るべく編集作業の電子化を日本で初めて導入されました。この経験を生かして、（公益社団法人）日本心理学会においても編集委員長として電子化に成功しておられます。さらには、心理学系の40の学会から組織される日本心理学諸学会連合では、平成13年4月から平成17年3月まで理事、平成15年4月から平成17年3月まで常務理事（心理学資格担当）、平成17年4月から平成19年3月まで副理事長（心理学国資格担当）を務められました。特に、心理学界の積年の願いの一つである心理学の国資格創設では、国内外の国資格に関する資料集めからたたき台の作成、医学会や医療機関組織との折衝など、その責任者の一人として積極的に関わり、現在の国資格「公認心理師」への道筋をつけられたことは、我が国の心理学の発展と心理学界の革新のために高い立場から強力な指導力を発揮したとして高く評価出来ると思われます。

最後に、学外の地域活動としては、昭和50年4月より現在に至るまで、京都府警察本部が実施する安全運転管理者等講習会の講師を務めておられます。この講習会では、安全運転管理事業所の正副管理者を対象に、いかに交通事故をなくすかを心理学の立場から指導されています。また、売血から預血へ、そして思いやりの心に基づく献血に制度変更されるに当たって血液提供率が低下すると危惧した大阪府赤十字血液センターから思いやりの専門家として種々指導を求められ、献血に何らかのメリットを加えることなどを提案し、実現されました。平成14年12月から平成19年4月まで、献血も含めた血液事業に関する研究の倫理審査委員会の委員も務められました。

以上のように、髙木修氏の研究・教育の業績は卓越しており、学界に大きく貢献する代表的な研究者として高く評価されており、さらには、大学行政、学外の大学、学会や地域社会活動においても、著しく活躍されております。髙木修氏の功績は誠に顕著であります。

以上